

沖縄本島南部米須浜貝塚に 於ける試掘調査*

国 分 直 一

Researches on the Shell-mound of Komesu-bama, Okinawa.

By

Naoichi KOKUBU

The field work was carried out by the author on the coast at the Komesu-bama district, Okinawa, from 24th to 28th of April, 1956. The trial trench, 2 meters wide and 8 meters long, revealed a prehistoric shell mound. The soil layer below the surface was composed of blackish organic soil with an admixture of broken bones of wild boar and of fish. The black soil layer ranged in thickness from 40cm to 68cm. Though the potsherds were found in fragment, frequent discoveries were made of wares on which simple patterns were incised. Not a whit of ceramics of earlier phase was discovered. They have a close resemblance to those from the late prehistoric shell mound of Okinawa and Amami. Mixed up with potsherds, many roughly-flaked stone fragments were unearthed.

—

1956年の春、久高島のシマシャーマ貝塚の発掘を行ったが、その際、琉球大学史学科の学生諸君に南島先史時代についての短い講義を行う機会を与えられた。その際学生諸君と共に実習をかねて小試掘を行うようと文理学部長赤嶺教授からおすすめを受けた。かくてえらばれたのが琉球半島南部の米須浜の遺跡である。調査は4月24日から28日にかけてなされた。米須浜の部落から海岸に出るには3本の道路があるが、その最も東端の道路の西側畠中に、砂丘縁から北に向って2 m × 8 mの試掘トレンチをあけた。2 m × 2 mブロック毎にⅠB、ⅡB、ⅢB、ⅣBと砂丘側から北に向って順次に番号を附した。小試掘に過ぎなかったが、沖縄本島先史時代後期に於ける様相を見る上に意義があることが明にされた。試掘終了後資料はすべて沖縄大学史学科教室に運び整理を行い、報告を作成し得る直前までの準備を完了して、沖縄を去ってきたので、何れ琉球大学史学科教室から報告書が刊行されるものと期待している。然し当時、筆者も覚書風のノートを作っておいたので、それによって作成した概報をかかげておきたい。

* 水産講習所研究業績 第257号, 1959年1月27日 受理

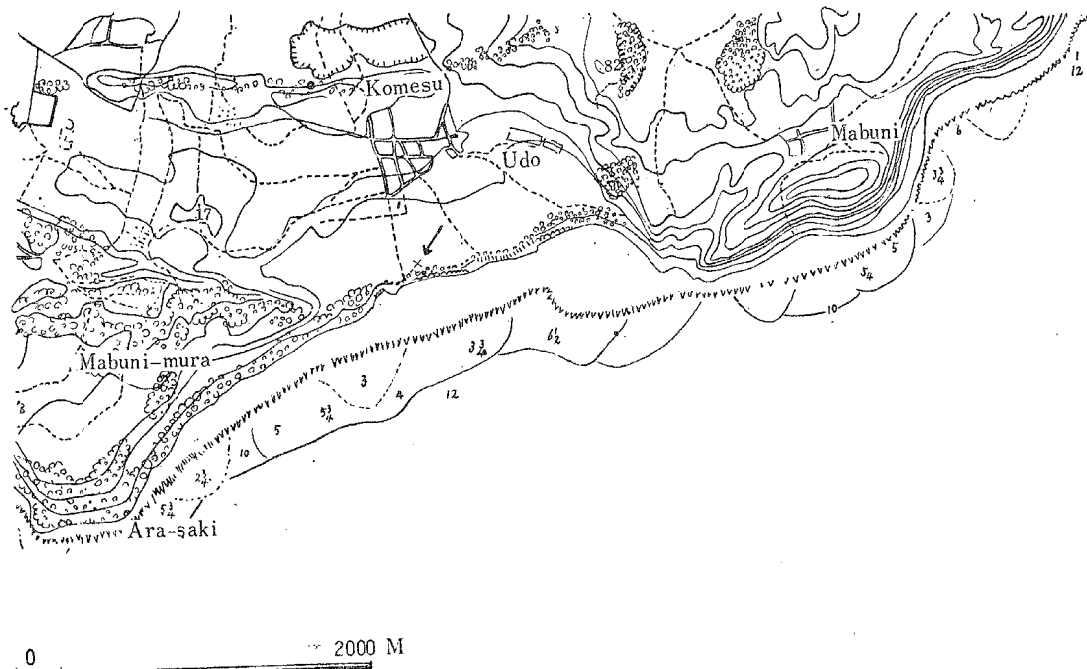
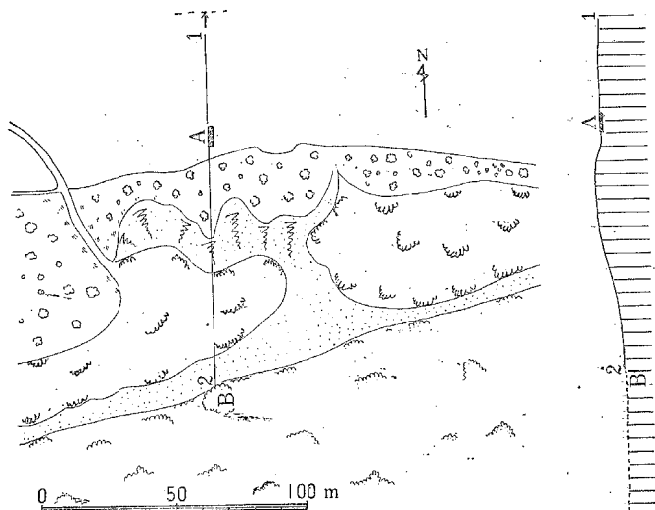


Fig. 1. Map of the Komesu-bama district, Okirawa.

—

米須浜の海辺には標高約10mの砂丘が海岸線に沿いほゞ東西に走っているが、その北側は平坦な畠地をなしており、南側は下降して珊瑚礁より成る荒い磯に連なっている。試掘地の真南の磯辺に泉地があり、飲用されるばかりでなく、洗い場としても利用されている。



A 試掘地点 B 泉 1-2 断面図作成部位
 ○ アダンを含む原生ジャングル ※ 砂地 → 貝分布圏
 ◐ 隆起珊瑚礁 ◑ 荒磯(珊瑚礁)

Fig. 2. Plan of the place where excavation was taken place.

おそらく貝塚時代にもこの泉地を利用して居住がなされたものと見てよいと考えられる。貝塚の拡がり調査が不十分であるために明確にはつかまれているが、砂丘線から北に約60mの幅をもって貝が散布していることから見て、かなりの拡がりがあるものであろうと考えている。

珊瑚礁の風化によって出来たと見られる褐色の表土の上層約25cm乃至30cmは耕作のために掘り返えされているが、表土は耕土下にも及び厚さは薄い部分で約40cm、厚い所では68cmに及んだ。表土下は約25cm乃至50cmの厚さの黝黒乃至黝褐色の遺物包含層となる。シャコガイ、ヒレジャコ、シラナミ、ヤコウガイ、タカセガイ、ギン

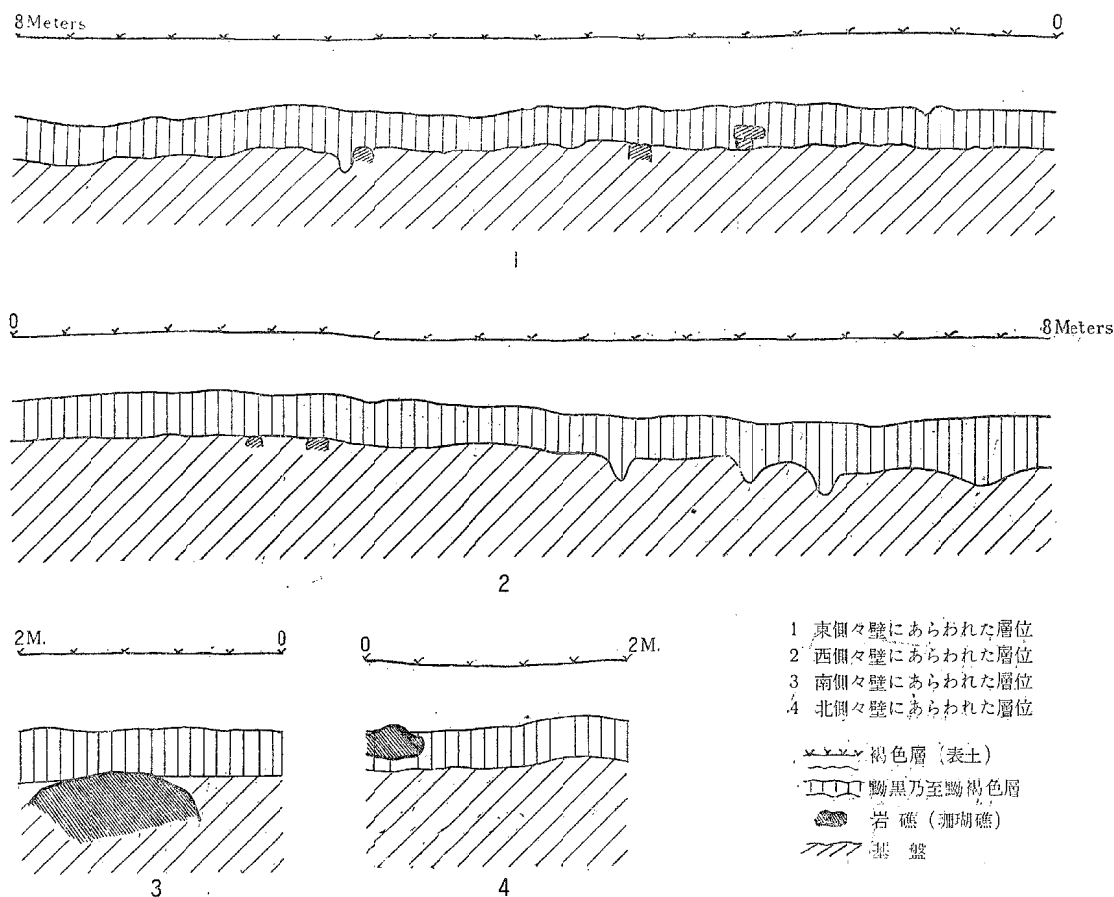


Fig. 3. Sections of Trench.

タカハマ、チョウセンサザエ等を含む混土貝層をなしている。この層の中には珊瑚礁の小塊も見出された。包含層下は珊瑚礁を所々に含む赤褐色の基盤層となる。

この地区は第二次大戦最後の沖縄戦の終末期に於ける激戦地であったために、表土層中深く小銃弾、砲弾破片が陥入して、その部分の土質を灰色の固い質に変質せしめていた。

先史時代の生活層は黝黒又は黝褐色を示して、基盤の直上に見出され、単一の層を成しているが、遺物はこの層のみでなく、基盤層面にも少量の陥入が見られ、表土層中にもかなりの混入が見られた。完形品はなく、器形の全形を推定出来るほどの大破片もなかったが、口縁器形、底形を示すもの、復原、図示しうるものはかなり見出された。(第4,5,6,7,8,9,10,11,12,13,14各図参照) 次表には遺物の総片数を表土、生活層、基盤層にわけて集計表示する。二器片にはやや大形のものから細小な破片に至る迄あるが、数字によってほぼ出土状況を明にしようと考える。

三

遺物について文化遺物、自然遺物にわけて考察しておきたい。

I 文化遺物

(a) 土器 器形は甕形又は深鉢形を主体とするが、壺形も見られる。口縁部復原 possible の

出土遺物 層位	土				器		石石 器片	貝器 貝匙 状 輪器	獸 骨 片	魚骨 ブそ ダの イ他	ウ ニ	近砲砲小鉄 代弾 々銃 陶碎 頭 片片部弾片
	土 器片 総数	口 縁 部			器体部	底 部						
		総 片 数	凸 帯 ^{*1}	刻 目 文 ^{*1}	口 縁 に 刺 突 文 ^{*1}	有 注 口 (片口)						
表 土 (褐色層)	一一 二二 〇〇	五 八二	一 五一	五	一一 三三 〇〇	三三 三三	*3二 一二		二 〇	四		七一一一一
黝黒一黝褐 色層 (黒土層と 略称する)	三三 二八 八五	二 〇一 八一	一四 一三八	六一 二一	三〇 〇〇 九一	*2 六八 六八	四一	四一	七 九	*5 一〇 一	一	
基 盤	二七 三三	三 八一	三八		二二 二九	六一			*4 一一	二		

註

*1 1例は三角状の凸帯。他の2例は平たいはりつけ凸帯, その上に刺突文が施されている。
 *2 断片であるため施文部位の詳細は不明。然し比較的口縁に近い部位であろう。
 *3 凹石。
 *4 11例中猪牙1 他はすべて長管骨碎片。
 *5 ウニの種類はパイプウニ, その棘。

もの25例中,壺形は7例見られた。底形は平底を主体とするが,底径の非常に小なるものもあり,乳房状の尖底器形が1例見出された。底部の断面図を作成してそのバリエーションを見て見ると,やや上がり気味の底をもつものは内部に於いて僅かなふくらみを形成する。これをA型とする。平底のものには内部を平板に形成したもの—これをB型とする—から摺鉢状に形成させたもの—これをC型とする—までであるが,このC型の底部の底径を小さくしてゆくと,外底は僅に上がり気味のものも出てくるが,極端に小さくなると乳房状の尖底器形となる。これをD型とする。即ちAからDに至る変移の幅があるわけである。底形の小さいC型,乳房状のD型は沖繩本島では台地を下った海辺の比較的後期の遺跡に出現する。その出現は砂丘に於ける遺跡に特に著しい。砂丘遺跡に於いてはC型—D型の中特にD型が卓越することは沖繩本島南部地区では川田原の砂丘地遺跡に於いて知られており,久高島の砂丘地シマシャーマ貝塚に於いてもその状況は発掘調査によって明にされている。海辺砂丘地への進出は漁撈盛行の事情と関係をもつと思われるが,土器に於けるC型—D型の出現は砂丘地であるから,容易に安定させようという事情と関係をもっていたのではなからうか。米須浜貝塚の土器は文様の単純化が進み,無文土器の流行期に移行せんとする移過期の土器である。文様はあっても口縁に狭い文様帯をもつもので,その文様も篋がきによる単純な山形連続文が多いが,幾何学的文からの曲線化を示すものが見られる。刺突文又は刻み目文を口唇の上縁につけているものもあるが,口縁部の比較的上方に帯状につけたはりつけ凸帯上に施したものもある。稀には器壁(口縁に近い部分)に刺突文を施したものもある。然しながらこれらの刺突文系の施文はこの貝塚土器では辛うじて残っているに過ぎないと見てよいようである。口縁器形を見るに上縁は僅かに波状を示すものが多く,甕形,深鉢形のものについて見るに,口縁はすべて僅かに外反している。ふくらみのある口唇を造形したものが見出されるが,この種のもは文様をもたないのが普通である。然し口唇上縁に刻み目を施したもの2例がえられている。口唇のふくらみが如何にして造形さ

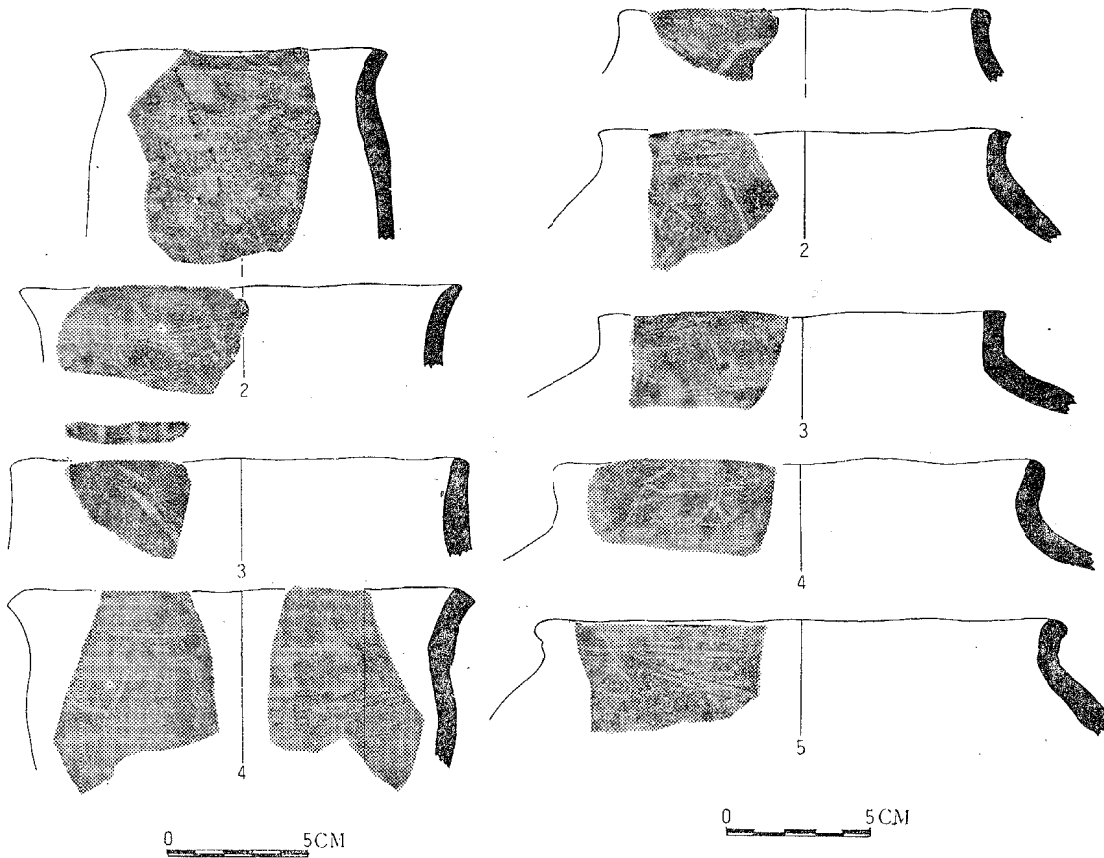


Fig. 4. Patterns and Profiles:
 1. Unearthed from the black soil-IB.
 2,3. ibid. IIB.
 4. Unearthed from the surface soil.

Fig. 5. Patterns and Profiles:
 1. Unearthed from the black soil-III B.
 2,3. ibid. IIB.
 4. ibid. IVB.

れるに至ったかは未だ十分に明にされないが、凸帯を有する例について見ると、口縁上端に極めて近い部分に凸帯を有するものが見られることから次のように考えられないであろうか。口縁上端に接近して凸帯を施したものは装飾的意味よりも口縁の補強を行う意味が強いのではなかろうか。この凸帯を口縁の最上位に移行するとふくらみのある口唇が出現する。はたして凸帯の上昇移行によってふくらみのある口唇が出現したものであるかどうかはわからないが、口縁部の補強のための造形であることは考えられると思う。

南島に於ける古式の土器に見られないもので、口縁部に孔をもうけたものが2例、片口の注口が1例(第13図(3))えられた。その他用途不明のものに、小隋円盤状のもの(第13図(1))大きな孔を有する三角状のもの(第13図(2))厚い粘土塊を折りまげるようにして焼成したもの(第13図(4))がある。

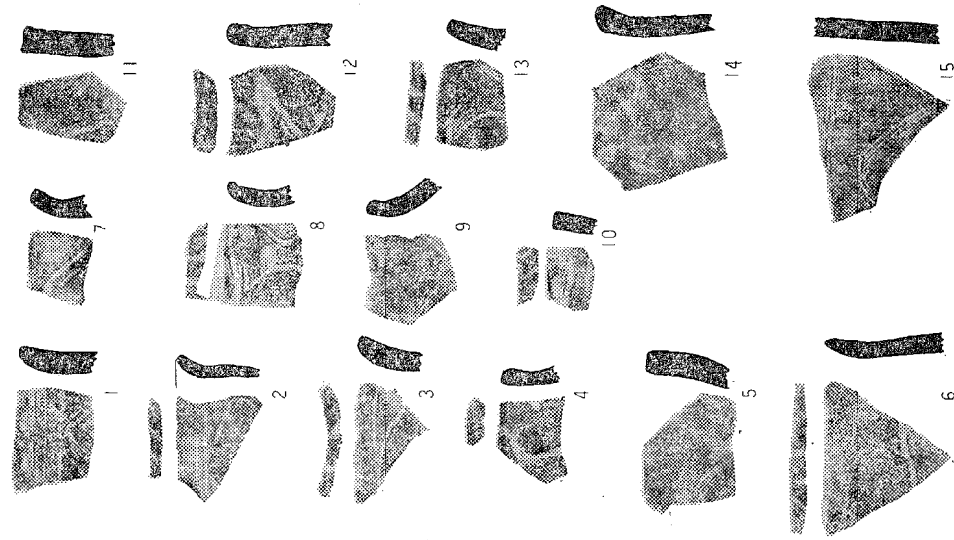


Fig. 7. Patterns and Profiles:
 1, 8, 12. Uncarthed from the black soil-IIIB.
 2, 3, 4, 5, 7. *ibid.* IB.
 6, 9, 10. *ibid.* IVB.
 11, 13, 15. *ibid.* IIB.
 14. Uncarthed from the surface soil-IB.

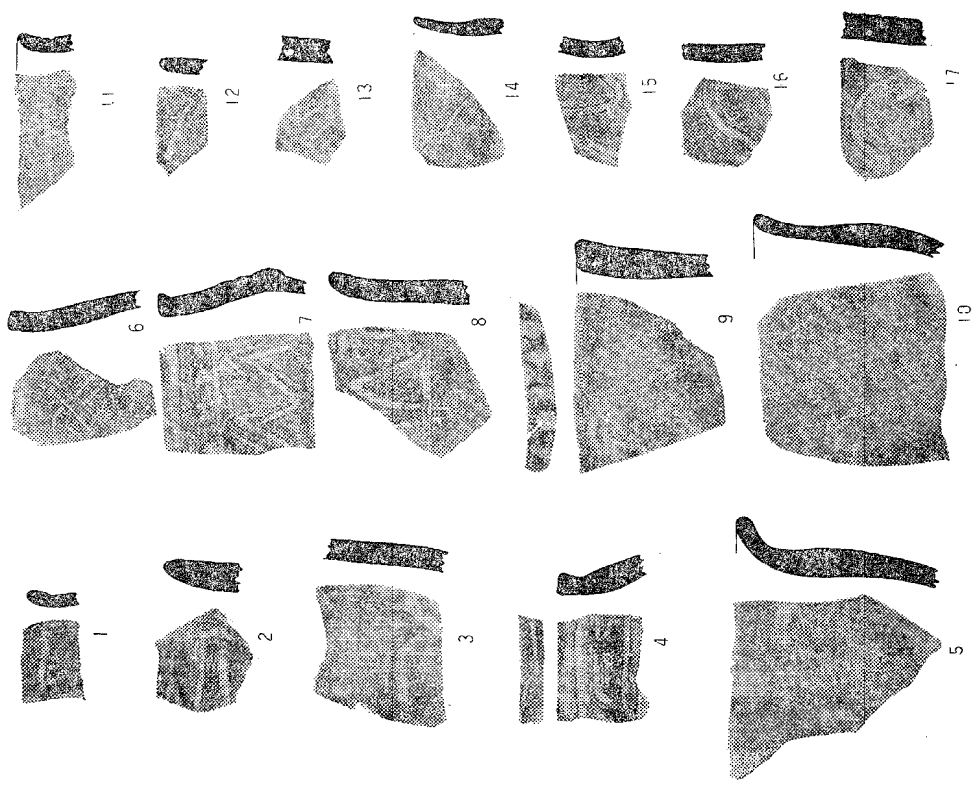


Fig. 6. Patterns and Profiles:
 1. Uncarthed from the black soil-IVB.
 2, 3, 9, 11, 13, 15. *ibid.* IIB.
 8. *ibid.* IIIB.
 4, 5, 6, 7, 12, 16, 17. *ibid.* IB.
 10, 12, 14. Uncarthed from the surface soil-IB.



Fig. 8. Patterns and Profiles:

- 1. Unearthed from the surface soil-IB.
- 13. *ibid.* IIB.
- 2. Unearthed from the black soil-IIB.

- 3,4,5,8,12,14. *ibid.* IB.
- 6,7. *ibid.* IVB.
- 9,10,11. *ibid.* IIIB.

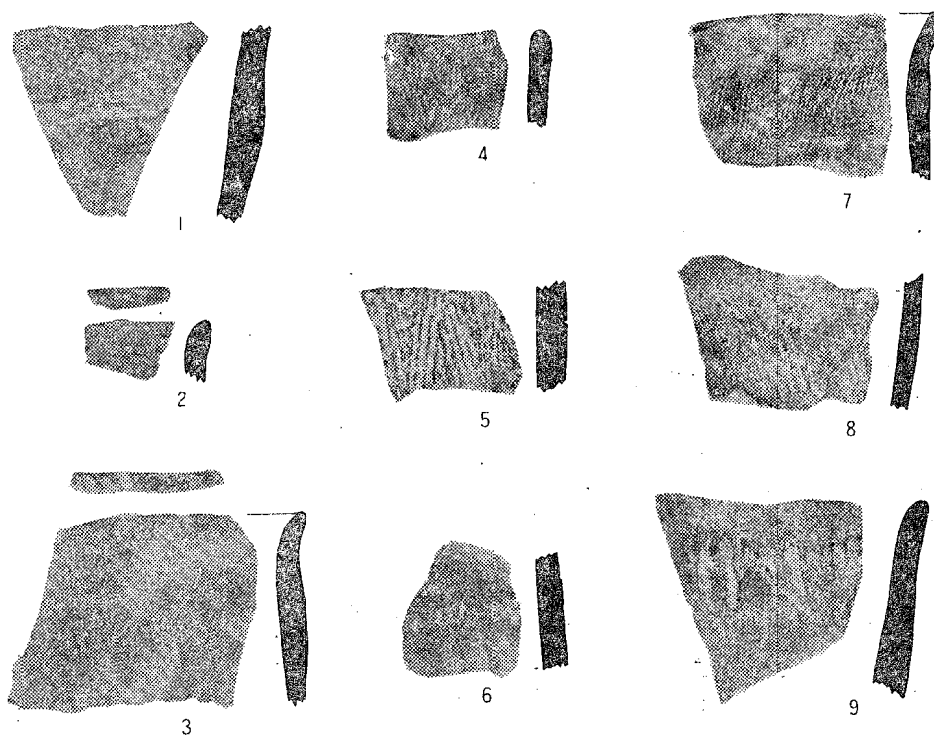


Fig. 9. Patterns and Profiles:

- 2. Unearthed from the surface soil.
- 1. Unearthed from the black soil-IVB.

- 3,4,6. *ibid.* IB.
- 5,8,9. *ibid.* IIB.
- 7. *ibid.* IIIB.

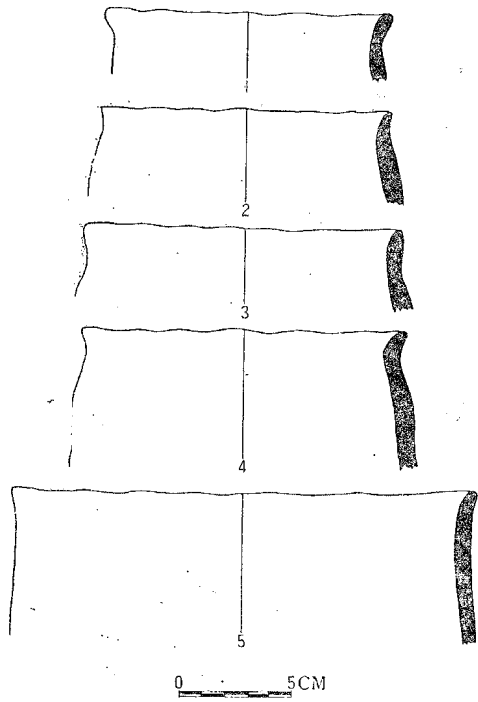


Fig. 10. Rim profiles:
1,2,3,5. Unearthed from IIB.
4. ibid. IIIB.

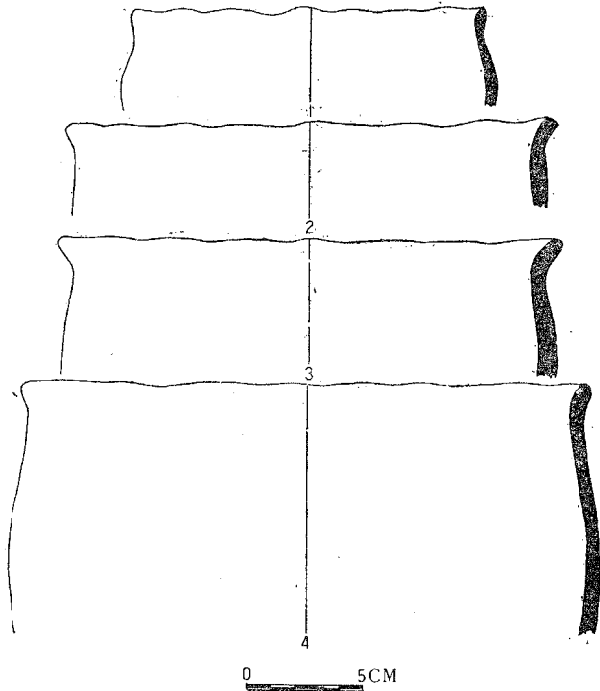


Fig. 11. Rim profiles:
1. Unearthed from the black soil-IVB.
2,3. ibid. IIIB. 4. ibid. IVB.

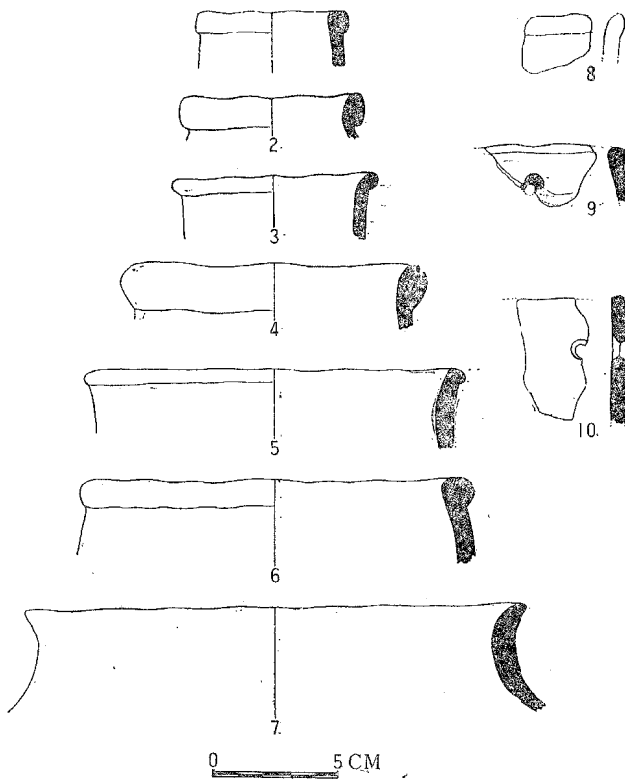


Fig. 12. Rim profiles:
1,2,10. Unearthed from the black soil-II B.
3,4,5,6. ibid. IVB.
8,9. ibid. IB.
7. ibid. IIIB.

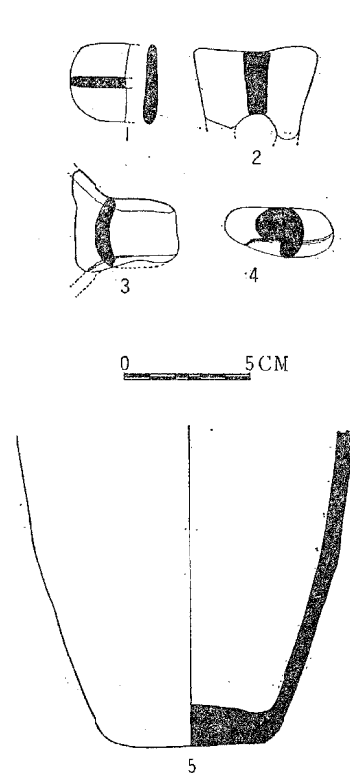


Fig. 13. Small objects unknown for their use & a piece of spout and bottom profiles: 1,2,5. Unearthed from the black soil-I B. 3. ibid. IVB. 4. Unearthed from the surface soil. IIB.

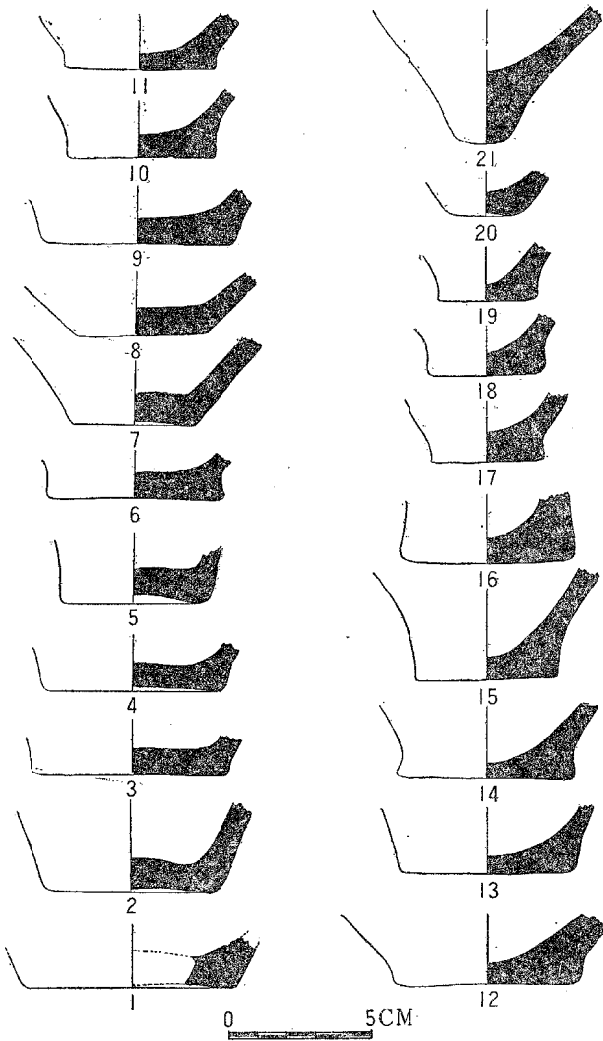


Fig. 14. Bottom profiles:

- 1, 5, 9, 16, 19, 21. Unearthed from the black soil-IB.
- 2, 6, 10, 11. *ibid.* IIIB.
- 3, 8, 13, 14, 18, 20. *ibid.* IIB.
- 4, 7, 12, 15, 17. *ibid.* IVB.

(b) 石器 石器としては表土層中から凹石が1例得られたのみである。石片(欠片)は表土中から22例, 黝黒一褐色層から41片見出された。器形を造形したものは1例もなかったが, なんらかの用途をもつものがあったのでなかろうかと思う。石片出土の状況は久高島のシマチャーマ貝塚に於ける石片出土の状況に酷似している。凹石は図版Ⅱ(4)に図示。

(c) 貝器 シャコガイ系のシラナミの殻頂部に穿孔したもの2例の他に穿孔したものが尚2例ある。後のものは1例は厚いシラナミに似た貝に穿孔して, 全体を円形に造形したものと他の1例はツキヒガイに似た貝に穿孔したものである。何れの標品も手もとにないので貝の種類の詳細は不明である。何れも孔径は小さく, 手環として用いたものでなく網の錘として使用したと考えられるものである。(図版Ⅱ, (1)(2))

以上の他に匙状の貝器が1例えられた。夜光貝の殻壁を用いたもので匙状に造形したものである。おそらく匙としての用途をもったものであろう。

Ⅱ 自然遺物 貝類は全種類にわたって標本をそろえてもちかえたので, 本所の網尾勝講師に同定を依頼した。

試掘地点に於いて貝塚を構成していた

貝類は何れも珊瑚礁にいる貝である。貝塚を構成する貝の種類は沖縄から奄美の諸島の貝塚のそれと酷似している。本貝塚の試掘地点に於いて見出されたものは次の16種である。

- | | |
|--|-----------|
| 1. <i>Geloina luchuana</i> (Pilsbry) | しれなしじみ |
| 2. <i>Asaphis dichotoma</i> (Anton) | りうきうますほ |
| 3. <i>Tridacna elongata</i> (Lamarck) | しらなみ |
| 4. <i>Spondylus</i> sp | うみぎく科の一種 |
| 5. <i>Cellana testudinaria</i> (Linné) | おおべっこうがき |
| 6. <i>Trochus niloticus maximus philippi</i> | さらさばてい |
| 7. <i>Turbo argyrostemus</i> Linné | ちょうせんさぎえ |
| 8. <i>Cyclophorus</i> sp | やまたにしの一 種 |
| 9. まいまいの一種 | |
| 10. <i>Lambis chiragra</i> (Linné) | すいじがい |

11. <i>Lambis truneata</i> Humphrey	らくだがい
12. <i>Bursa rana</i> (Linné)	みやこぼら
13. <i>Bursa bufonia</i> (Gmelin)	おきにし
14. <i>Fasciolaria trapezium</i> (Linné)	ひめいとまきぼら
15. <i>Fasciolaria filamentosa</i> (Roding)	ながいとまきぼら
16. <i>Purpura armigera</i> (Link)	しらくもがい
17. <i>Mauritia</i> sp	たからがいの一種
18. <i>Strombus luhnanus</i> Linné	まがきがい

魚類はその頭骨から見て主としてブタイ系の魚と見られた。ウニとしてはパイプウニの棘が見出された。獣骨はすべて野猪で長管骨の碎片を主体とするが、猪牙も1例えられた。

四

米須浜貝塚の形成された時期は土器の上から見ると、沖縄先史時代の後期に属すると考えられる。遺物の上で、特に土器の上から見て米須浜貝塚に最も共通性をもつ遺跡としては筆者の調査した範囲でいうなら、久高島のシマシャーマ貝塚であろうと思う。然しながら後者の土器は無文化の過程の上で前者のそれに比してやや進んでいるようである。有文片の出土瀬度について見るに後者のそれは米須浜に於ける瀬度に比してずっと少い。底形から見ると後者にあつてはC型、D型が比較的多い。殊にD型即ち乳房状尖底器形が多く見出される。同系の遺跡と見られる本島南部の三和村真栄里の川田原遺跡の出土資料は琉球大学史学科所蔵のものによると乳房状尖底器形が見出された。多和田真淳氏によると同系の遺跡は琉球本島の海辺地帯に広く見出されるようであるが、久米島にも見られるという。

周辺諸島との関係を八重山圏及び奄美大島圏に拡げて見るに、波照間島で波状口縁をもつふくらみのある口唇を有する口縁部が得られていることから見て、米須浜期には八重山圏との間に交渉があつたと考えてよいと思う。口縁部に近く耳状の把手を水平につけた器形は米須浜でも久高島でも発見されていないが、沖縄本島後期遺跡中には発見されている所があり、奄美大島圏では徳之島面縄の東浜にふくらみのある口唇を有する口縁器形、尖底器形と共存して耳状の把手を有するものが見出されている。耳状の把手を有する器形は八重山圏の先史時代に流行していることから見ると、琉球先史時代後期には八重山圏の土器文化の北上していることはほぼ疑いえないように思われる。

昭和30年以來30年にわたる奄美大島諸島の考古学的調査が行われた結果、尖底器形が目されるに至つたが、この器形は奄美圏に最初に出現したものでなくて、沖縄本島を中心とする沖縄北部圏の海辺地方に出現したものが、北移したものであつたと考えている。なぜかなら沖縄本島及び久高島に於いては宇宿上層式に先行すると考えられる有文土器の行われる時期に早くも乳房状尖底器形が出現しているのである。

沖縄圏に於ては宇宿上層式に見られるふくらみのある口唇を有するもので口縁部に曲線化の過程にある描文を有するものがあることは米須浜出土品によって知られる。

土器の変容を促したものは生活の上での何らかの発展であつたと見てよいであろう。とするなら、先史時代に於ける南島の生活の上での中心的舞台は奄美大島圏よりも沖縄圏—沖縄本島を中心とする—にあつたと見てよいものであろう。生活の上でも発展とは何にを意味するかは

むつかしい問題であるが、貝錘の出現から見て、網使用による漁撈活動の飛躍的発達があったものでなかろうかとしている。然かもこの時期には八重山系の耨耕技術の北上が考えられるようである。然しこの問題については稿を改めて詳述する機会をもちたいと思う。

貝類の同定をして下さった本所増殖学科網尾勝氏に感謝申上げるものである。尚本調査に当り、その調査の機会を与えられた琉球大学文理学部史学科教室及び調査の便宜を与えられた琉球政府文化財専門委員会に対して深く感謝の意を表したい。

P L A T E

PLATE I

1. Jungle near the trial trench.
2. Back view of the dune covered with jungle.
3. Trial trench.
- 4,5. Views showing the unearthened potsherds and bones.

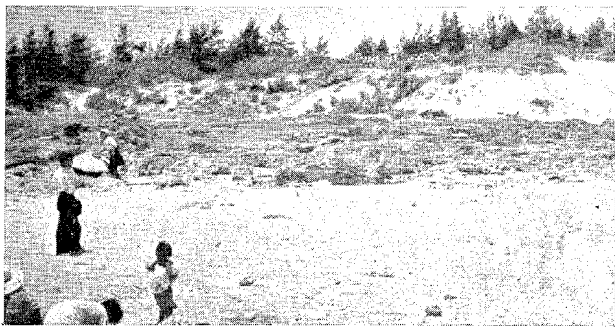
PLATE I



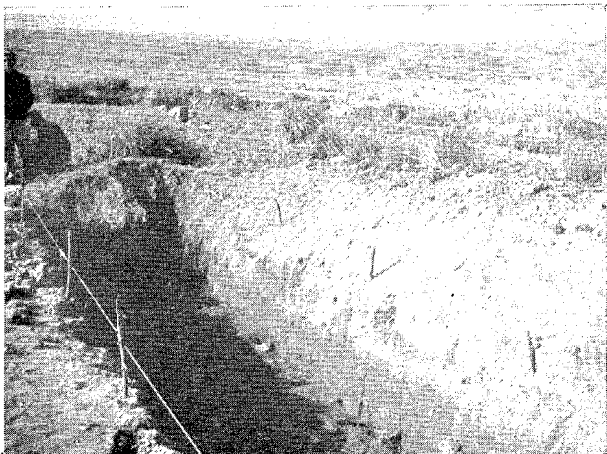
1



4



2



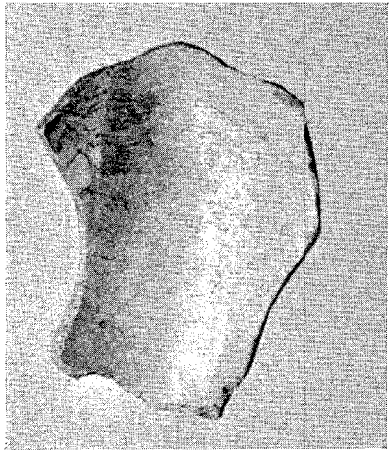
3



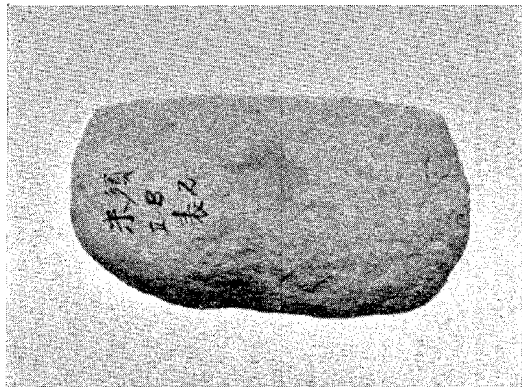
5

PLATE II

Stone and shell implements.



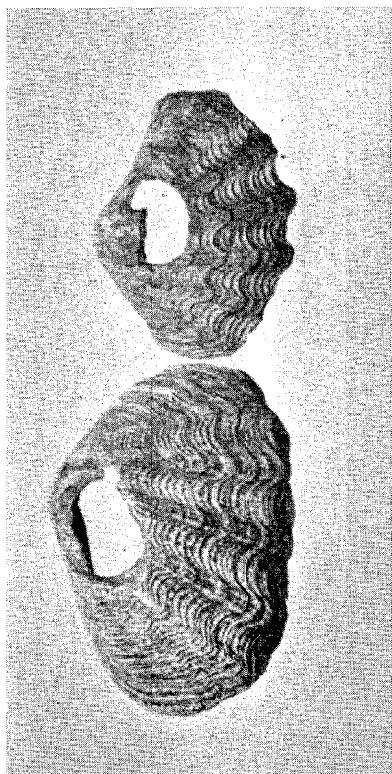
3



4



1



2